

若い衆カモーン!

…技術もヒトもつながるように…

萩本・亀田有機農法研究会 萩本了一さん 39歳の巻
(奈良県西吉野村)

7世紀前後(奈良時代!)にすでに干し柿や塩漬けなどに加工されていた柿。室町の頃には奈良は柿の産地として知られていました。現在、五條市と西吉野村で生産される柿は奈良県の85%。あの山この山ほとんど柿山という大産地で地域の環境も守ろうと活動する萩本さんを訪ねました。



萩本さんの左腕後方の「山」。これが産廃富士!

■後継者は多い。

でも環境保全型は少ない。

「日本の農業の中で後継者不足の悩みを持たない地区は2つじゃないかな。レタスの川上村と、ここ柿の吉野・五條だよ」と萩本さん。萩本さん自身も農業専門学校を経て後を継ぎます。刀根早生、富有、そして梅を栽培しています。「長男だったからそれが普通やと思っていた。うまいこと親にいいくるめられたんかなあ」。

でも、除草剤を使わずなるべく薬を使わないという柿農家は残念ながらあまりいないのだそうです。「なんでいまの栽培方法にしてるかって? うーん、じつは最初は省力化が目的やったんです。昔は農薬も人力。2人でポンプつかって山回ると5日、これを年6回やるから30日かかる。草取りにすれば2人で15日、年3回で45日になるから。なまけもんなんですわ(笑)」。

さて、そんな萩本さんが有機農法研究の道に足を踏み入れ始めたのは、亀田嘉さんと出会ってから。

1回の農薬散布でも、雑草や虫、小動物たちの生きようとする意思のスクラムを一瞬にしてずたずたにしてしまう。だから無農薬にこだわる(*1)。

そんな亀田さんをはじめグループのメンバーは土から作物そしてまた土へという循環を目指し実践している一家言ある人ばかり。ますます影響されているそうです。技術交流集会や小祝塾へも参加し、病気に負けない健康な樹木づくりを目指して施肥設計にも取り組んでいます。

■西吉野の水を守るために

訪れた翌日は地元のお祭りの日。萩本さんをはじめ若き後継者たちが主体となり準備をすすめていました。「水はいのち 一の木まつり」。会場は西吉野の水がめ、一の木ダムです。

実はこのお祭り、西吉野村に出来た産業廃棄物埋め立て処理場に反対するべく住民が立ち上がったことがきっかけでした。埋め立ては89年から始まり、当初村道の高さまでという約束が、あれよあれよと積み上げられ高さ20m以上、谷底から測ったらいったい何m?という高さに。“産廃富士”という不名誉な名前までつく始末。

運びこまれる産廃は「安定5品目」といい①プラスチック②ゴムくず③ガラスくず④金属くず⑤工作物の除去に伴って生じたコンクリートの破片など、決して形状が変わらない無機質なものだけという話ですが、⑤のいわゆる建築廃材がくせもの。家屋を壊した場合、家の中のすべてのものが建築廃材としてくられるからです。何らかの反応で自然発火して黒煙をあげ燃えつづけたことも。



お祭りの会場にはこれまでの活動などが展示されていた

「産廃富士を通った雨水は一の木ダムに流れ込む。そのダムの水を利用して

る柿農家もいる。(*2) これ以上業者の好き勝手にさせないため、そして水を守るために立ち上がった。いまは産廃の持ち込みは停止されたけれどこれで終わりではない。初心を忘れないためにもこうして毎年お祭りとして声をあげ続けているんだ」と萩本さん。

緑深い山奥に突然現れた産廃富士。その中には東京都のごみ袋も。回収車がくれば消えてなくなるものと思っていたゴミ。それが遠く離れた自然豊かな谷を埋め尽くすことになっていったとは。埋め立て処理業者の振る舞いに怒りを覚えながらも原因をつくるのが都心に住む私たちなのだという事実、改めてゴミを出さない生活を心がけようと思いました。

後継者不足の悩みがないというだけに、一地域に多くの若い生産者がいるのを見たのは初めて。その若き後継者たちが水を守ろうと団結している姿に奈良の柿は安泰だなと思う一方、さらに土の循環をも守ろうと転じてくれる人が一人でも増えることを願ってやみません。

萩本さんのつぶやき



今年はカメムシの被害も少なく病気の発生も少ないよ。勉強して試したことがこのままよい結果になっていくといいね。

柿は美だけでなく葉も紅くなります。この辺りの山全体が紅葉してそろキレイですわ。ぜひその頃に見に来てくださいよ。

(*1) 亀田さんはナスを主に栽培しています

(*2) 萩本さんの柿山の水源は別の沢なので汚染の心配はないそうです